

野原文四郎



(前略) 明治の元老伊藤公(博文)は、初物食ひと稱せられた程、あらゆる栄職の初代を占めた。

翁(野原文四郎)の飯田での場合もそれに似て居り、商工会議所会頭、信用組合長、消防組頭、市長等々。悉くの初代に推され、遂には彼の翼賛選挙の場合の如き、心ならずも推薦者の地位に据えられ、名実共に飯田の第一人者たる事を裏づけられた。

それ丈あらゆる部面に於ける初代責任者としての、結成から運営への人知れぬ労苦と貢献とは多大であった志、今残るそれらの団体は苦勞を多としている事だらう。最も留意すべきはこれ等の重職を引続き初物食ひをなさしめたと云ふ衆望の帰一し方、さうさせられた翁のあり方であらう(中略)。

第1野原さんは「聡明」であった。学識が豊富でなかったのを常識によって補填して居り物事に対する判断をあやまたなかった。世評は「聡明すぎる」とさへ云ってゐた(中略)。そして第2に「内剛」だ。一口に外柔内剛と云ふ。持って生れた長者風の温よかきで寸分巧まざるものである。外觀の温容さを以てして内心には負けん気の、進んで戦ひとる体の氣丈さと氣魄と、そして一面デットと忍苦し黙座し得る体の氣強さを持って居た。

そこへ持って行って「度量」が広がった。一口に野原さんは「敵のない人」と云はれたが、ついぞ人を憎んだためしが無い。だから敵の出よう筈はなかった(中略)。

そしてそれは性得の「明朗」さによって裏付けされてゐた。明るい感じ、晴々しきは態度の上に、その音声の上に始まりき達にくれ上ってゐた。心からの明朗さである。と云って「周到」さはズバ抜けてゐたから、積極的に進む場合であっても石橋をたたいて渡る体の用意深さから、あぶなはなくしくじりはしないし、明朗な割に消極的な歩み方、進み方をした。

そして「無慾」であることが前掲の5つの特長を生かしたのである。道義のすたれた今日、公事に尽した先人に対して愛敬の念を注ぐと云った風の觀念も薄れてゐるのに、野原さんに対してだけは、相当多数尊敬愛敬してゐる者があり、殊に未知不識の人達にあると云ふのには此の無慾が一番にはたらかかけている。だから翁の働き盛りに之だけは有象無象にもハッキリと知られていた。よって以て前記の5特長が生き、世にも人にも重んじられたと云つてよい。通じて此の6特長に由る本質的野原さんが生彩を放ち、それを宿づけていたのが「金」であり「氏」

であつたと云へる(中略)。

此処に大書すべきは次の金文字だ(勝海舟所言)

処世超然 応接豁然 有事断然 無事澄然 得意淡然 失意泰然

翁は壮年時、之れを座右の銘としやうとし会々来飯中の東久世通禧伯の達筆を煩わし懸額として居室に掲げ、居常之れに親み、その体得に力め、六然とも号した。六然の1つ1つが翁にビタリとくっついてゐたが中で最もイタについてゐたのが「有事断然」であり、之れこそは翁の独壇場であつた(中略)。

財界部面では断然此の「有事断然」振りを發揮してゐる。昭和6年百十七銀行があはや取付けに会はうとし急提休店した。峡谷未曾有の金融恐慌來であつた。此時、伊那銀行重役(当組合長)であつた翁は全財産を提供しても預金者に波及せしめずと時艱の取捨に乗り出し、一氣呵成に恐慌來を防止して百十七の再起に資した。此款急策こそは翁なればこそ出来た。それ丈此間の消長を知る者は翁の飯田第一人者たる事を再確認した。

と云へば昭和15年の銀行合同に際しても翁は立つて指導者となり、急速度に之を執行した。そして更に八十二銀行への合流の場合にも産婆役として重要な役割を果たした。

斯くてその「有事断然」は最も翁の超凡を物語るが昨春の大火過ぎの家庭における老來の頑張りこそは知る者をして思はず感泣にむせばしめた(中略)。

22年4月20日の正午近く、呪ひの焔が毒蛇の舌のやうにめらめらと市内の一角にゆらめいた。と見る間に(中略)溶鉱炉の火のような猛然たる火勢に変わって、四方八方へ燃えひろがった(中略)。翁は身1つで上飯田方面へ難を避けた。刻一刻と燃えさかり行く情報を受けていたが、やがて原町の別荘が辛くも延焼を免れたと云ふ情報を受けた。とキツとして立ち上つた翁である。(中略)77の老軀、しかも十何年来の宿病で起居に不自由をかこつていた翁。持ち味の「有事断然」がカキリと翁を火の玉にしてゐた。踏む足も軽やかに闘志に燃えさかる意氣、壮年時代のそれにチツとも変りなく別荘へ着いた。そして驚くべき事には、ものの1時間とたたないうち、まだ炎々と燃えさかる本邸のあたりを、壮年のやうな体の取廻し方で踏査している健氣な翁あるを見出したのだった(下略)。

下平政一著「飯田の第一人者」より

の深刻な恐慌の芽を見ることができた。

組合は庶民の砦として立ち上った。役職員が一丸となって組合精神を町民に説き勤儉貯蓄をすすめる新組合員の受入れに努めた。事務のわずらわしさをいとわず零細貯金の吸収にかけ回り信用程度のゆるす限り低利でしかも月賦償還を認め貸付けに応じた。7月28日、理事に電話連絡して全員の賛成を得たので、50円以下の貸付け利率を2銭4厘(証書)と2銭3厘(手形)、100円以下の場合は2銭5厘と2銭6厘に引き下げた。

事務所の建築を記念して出資を募集、これに応じた人たちは加入金と増口金の免除を行った。100円定額貯金を設け年利6分を7分にしたのも効果があった。

貯金を金額別に見るとやはり100円以下が断然多く624人が1万5,174円余を貯金、1人当たりでは24円余となっている。

なお同年度の剰余金は3,508円72銭にはね上った。

この年2月18日全国市街地信用組合協会が結成され都市金融機関としての性格をはっきりさせるため産業組合法から離脱、大蔵省の専管とすべきだとして政府への働きかけを始めている。当組合も協会に加わり2年11月25日、第8回県下市街地ならびに準市街地信用組合協議会を飯田町で開いた。

(6) 初代組合長のこと

初代組合長野原文四郎の履歴について組合の許可申請書にはこう書かれている。

「町の有力者ニシテ酒造業ヲ営ム管テ町長ニ就任スルコトハケ年余其他消防組頭郡会議員等ニ就任スルコト永年、現ニ飯田商工会議所会頭、所得税調査員、営業税調査員、長野県酒造組合聯合会副会長、学務委員等ノ職ニアリ」

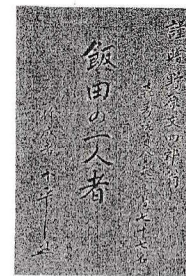
今から300年ほど前の飯田商人分限見立帳(長者番付)に頭取綿屋文四郎の名がある。「綿屋」は近江商人が飯田に住みついた人たちの説があり東関協に綿屋与兵衛、西関協に綿屋半三郎などの名が見える。

飯田藩宗門奉行所常置の宗門改帳、正徳2年(1712)記載の町役人名中に間屋文四郎とあり野原家はこのころ既に町で重きをなしていた。続いて享保11年(1726)、天明3年(1783)分も文四郎は間屋として名を連らねている。商売は造り酒屋で宝暦2年(1752)から質屋を兼業した。

当組合の初代組合長は明治23年(1889)3月12日、同家10代文七郎長女きぬ子と結婚、11代を継いだ。明治2年(1869)10月21日伊那郡南向村(中川村)の豪農高坂謙輔の次男に生まれ

幼名を胤雄と云ったが婚後文四郎を名乗った。叔父に桑原保松がいた。南向きっての豪農、推されて県議員となり家業を見る暇がなかったころ村の小学校を出ただけの甥の胤雄を引き取り家の切り盛りをさせた。この叔父は漢学の造詣も深く歌句をよくし書道に秀でており宗古と号した。多感な少青年時代を桑原家で過したことが彼を大成させる原因となった。

数えの33歳で町会議員、39歳で郡会議員となり明治42年(1909)3月、41歳で町長となった。それまで渡辺猶人、伊原五郎兵衛、上柳喜右衛門、木下与八郎といった町の長老格が占めてきた椅子に政界では「若い者」の中に入る彼が就いたことは町民の目を見はらせた。が既にそれだけの實績と識見を兼ね備えており3期にわたって職責を全うした。この間町の将来を考え飯



田小学校の部校を浜井場と大久保に建設、難問題とされていた町営火葬場を鼎の八幡原に設けている。江戸時代の碩儒太宰春台邸址約50坪(坪3.3平方メートル)を町費で買い入れ保存の途を致したのも彼の町長時代である。

その後しばらく家業の酒造に専念している。銘柄を御国春、富士正宗、立浪と云った。下伊那酒造組合長になり地酒の品質向上、増産に努めた。

すでに飯田の政財界に於ける一人者となった彼の横顔については冒頭の初代当組合長の項に引用した下平政一著述に尽きる。

戦後財産税の賦課、農地開放、さらに飯田の大火等に遭って家産を失い昭和26年(1951)2月卒。行年81であった。

産業組
明治の
井上も興
ものを使
らに電気
まとまっ
議、有限
間50カ
科字庄司



電
当初製
11年(1
電所を
収収さ
より10
伊那第
あった
大正5
た。
する